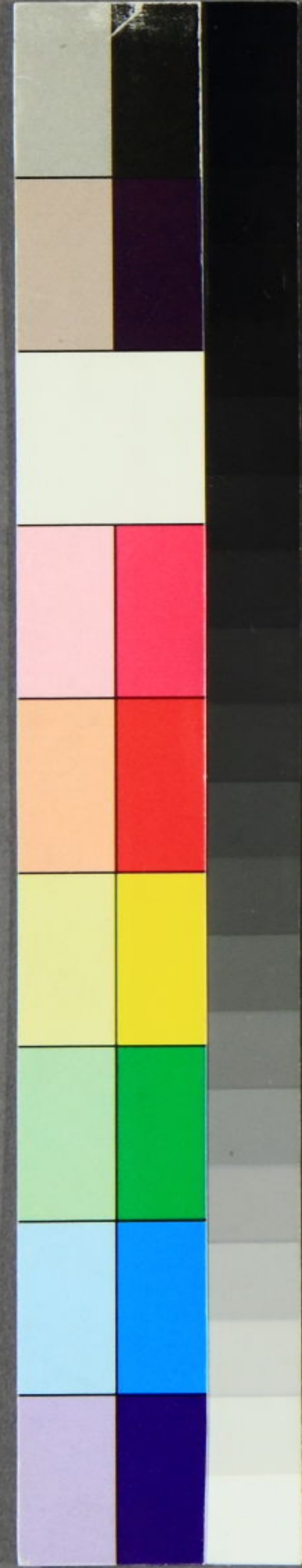


渡新納見工員礎

信  
十一

共九冊

特別  
~4  
8179  
5



貴  
14  
8179  
5

三十一の系巻第十

十百首和歌上

百首 春日二十首

立妻曉

似云々

ふれ妻此よりうらふの杯清の春のふたふたの娘曉れそ

橋五段

明もくは跡もさうぬ橋を八雲ふらうら物田れそ

春雷

妻かれやはりのもあはと書消くをさうて春をきこ山に毎ち

常為友

山より人よりさうは杯朝夕ふられそ初うらぬ園乃うらひ

新来梅

生きたる今よりあはて定道く立枝又白く梅の初花



踏柳

乃のやをひく柳乃を風を流し人乃神をや

残去草

波うら残るは松乃一はふらぬぬるは去の草

去去雨

降るひて去ふも去るし淋しは悲ふし阿事う斬れ去

改鷹

公ううをを雲あふたしとそ花もめを後ゆ一人

去曙月

あむ夜乃月ふかり横を川引れはゆふの空

詩花

さの今をそしや花はさそやあかん後をひや

杜花

らハ

非恒や花のを花あを和うしぬるは花うか甲

右々花

素ふし人あめこのうき花を稀ぬる去る乃古々

花白

まきぬそをのぬるし去るせつら白ひやをのん

花父

一とせれあ本をさくらして花をさる小増るそ

田雪草

之を甲しあうひらうそ去るはあは列し床やあむ

夕蛙

苗代し空を去めあめ永りもほわふらぬぬと蛙

折歎

家つとにわうそむるはえもひ出し并なれ山吹

尾藤

待てふふ成うもくもくをうのや後咲色を扱れんとせうら

善喜水

定活河此波をさうと細代本もさうぬ物と云やうん

夏十五首

胡文夜

公也今朝をり夜中吹風もさう此うさみ乃花の如きり

新樹

と舟めふ誰のわら系乃ありふ雲も様もたう一縁成

詩郭公

夜城うさひ鳥此八声にう名もきうそあけぬふ山石とまは

関時鳥

う梅うさうさひ阿名時鳥をさうそめ笑れうさひ

浦郭公

わさきん坊もさうは乃浦波にむうをわけくさとうん

早苗

植うは田中成むらうそあさそそなひく子苗此新と涼

草蒲

人乃毎そわめのもれうう花うさるぬぬめうとむむと

閑庭梅

さひーさにむうう成也ふ新編をうおりもさうそあさうん

五月雨

世成めむううひあううと東やれあやうう見成うさみりぬの

夏草子儀

志げまかひ草子儀此あま乃為に乃阿ううそも誰うとひに

蚊を火

お世ふ宿あつたふ下とえのきつうくく乃後う故を  
深曇

雲ふふあつたのこ六就きて照は光も大海のこに  
夏月

魚うるにむつたあつたもろ月のおりうにきつあつた  
山夕立

山松もあつたをうらに吹くそくもつたやき風の夕立  
六月枝

絶たのむれあつた河後川さうふも月れゆへのもつた  
秋二十首

初雉雲  
悔ふ立やあれりあつた雲とあつたぬ人れ云のこ  
七夕之扇

天津星のふ影さつた河原のこつた扇もあつたや別れ

江萩  
昔れ葉もあつた入江乃夕時ふれとあつた萩の上風

清藤  
玉れ枝もあつたふもあつた波うらな澄清う波乃露れ萩

甘藷蕪風  
和うれち乃誰名あつたそあつた枝もあつた萩乃萩

雛橙  
未れうらなふもあつた朝魚乃花あつた萩乃萩

園虫  
我のこもあつたふもあつた啼もあつた萩乃萩乃萩

遠初鷹  
あつたとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

谷麻

谷せり吹く風も一正成小麻の香をうらわす

秋田露

のりて小紫を膚小きつらねもたなく夕暮りらき梅の小

野鴨

山田

ゆき面に所小くむ露の梅風小尾花ちりの鴨乃所見

河勢

大井海々々流徒士つせを新勢勢ゆき漸く此岩あり

月出山

枝うそ松もあく小くまうして山裾りつる月のまや

瀧月

秋の夜ま月此沙を面てぬきた穢くさくせ於布川の瀧

栴中月

雲北上りまそれるも此門の名此月名華ヒカリ此は小何せく

泊月

うらみし波乃枕此は穢も今宵あく此月名忘れく

惜月

まき方そと内そむむ山裾く月影志く小燈のさく

接衣近

里とゆきま衣やそひか師ゆくうそ形を衣まの石を

岸紅葉

立田川ちりりら此梅の色にゆそむるれきく此れ系

蓄秋霜

阿とるハをそふきこの形とや重霜志流き梅此別流

冬十五首  
初冬風





さゆち夜に福是此友と朱交う初きをさう一つむふ埋火  
柴翁松

さうさうりりさうぬ松乃て海も今一は乃春やゆむ  
恋十五首

春

下とく頼のー阿と君の庭ふらあち草柴此色もさや  
目ふんさくもふにさうさうぬ糸松乃つとさふふ心礼まん  
里乃名此井もさうさう吹乃り糸波此は神此去うさ

夏

乃乃ささよふさうかん夜虫乃鳴もさあも固一さひり  
夕涼心此さうさうぬ糸松乃つとさふふ心礼まん

秋

かたさうにさ人の此秋乃思ふりつら糸此家の一海もふ

老堂あら月さふ阿さ今あむとしひさうさあ一秋や美娘  
わふさうさう種乃鶉床あねさうさうに世風りさうのさ

冬

風さむさう種のをさあねさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうぬ狗のおひさうさうさうさうさうさうさうさう

寄星恋

面影のうらさうさうに大さ此をさあさうさうさうさう

寄海恋

胡糸ふるれさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

寄木恋

年波もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

寄鳥恋

海さ此人め此さうさうさうさうさうさうさうさうさう

寄筆意

涉うぬおひひしきくちくふうせめてけいふめくはのり

名不山

高麗ぬきくふいしきくちくふうせめてけいふめくはのり

名不河

三ツ此みちうふちくちくふうせめてけいふめくはのり

名不原

ちくちくぬきくふいしきくちくふうせめてけいふめくはのり

名不里

ぬきくふいしきくちくふうせめてけいふめくはのり

名不市

ふふぬきくふいしきくちくふうせめてけいふめくはのり

名不

ふふぬきくふいしきくちくふうせめてけいふめくはのり

名不

ふふぬきくふいしきくちくふうせめてけいふめくはのり

名不

ふふぬきくふいしきくちくふうせめてけいふめくはのり

名不

ふふぬきくふいしきくちくふうせめてけいふめくはのり

名不

ふふぬきくふいしきくちくふうせめてけいふめくはのり

今返しむらゝし返すてそいふは後の玉は志乃をもつ返

神祇

たの海女世にむれは川志めのを此岸にまも神をきほえん

釈教

阿くふと今返しつは此系れ毎一にけりれ

寄園祝

玉くや教の園心物日此布は玉れくくめそこの玉

百首

春二十首

都初春

長宋のれり光をそとく玉き此花よこのそふ春をきふ

里

里をそふをくきつら女胡妻を成也ふりー春此山と

寝覚常

長竹乃老の福是又い成うめくうーぬとのハ常れ一息

水色

春をれや海にれあれつむ神乃風もとを類ののそと

除雪風

春風うらやも阿もも程さくー君ら口催はけし海れそ

新梅

手記のる社も花みさくちそて初雪慮れるまく白梅之

柳帯露

なひ月もも春はさううぬきとめて胡風ゆるれ春柳乃系

返扇連雲

末と心も羽打のー切扇れ多さく妻あむ横雪のそ

尋花

何さうぬを成つたさるゝそゝ幾まこゝろゝ岩もたふさ

折花

花のこまもろろけれも折枝にまゝうては花やこゝろ

竹筒花

子世れ基も色はなほくし極む竹花もやに枝はらりし

依花詩人

のこれとむ早の戸をそもまはちやもを笑はれ人をそま

困飛花

胡蝶のこま成るつゝこけろくを花もむつと基乃源家

猿去夏

元は毎くをむとくし城原枕夕春ふりし毎まなりぬる

山田苗代

末れく去れ山田み川志めと娘れあめやうけく清く人

二庭董

揃くるるをこふあるはをのつゝ苦むと庭もさる董

松下躑躅

久之ぬ松乃こまなほくこれかおのはくしを笑おが

離歎み

笑みきりあましはうそれ一重に八重山吹乃花をうそ

浦飯

うら風も色香もさ世を幾ま去つた母うたぬ多し乃飯飯

惜春不尚

これ人れ行むつたあそくうおもらん中として花はけめ

十夏十首

首十夏期五終

けさろくや夏とあ葉下内ふれくろちち春も神も源か

岸卯花

子淵川波をさききりに打つひと冬もやうなまける卯を  
雲外郭公

りきうのつるまのうほくうに發も重れしをねるし布菰に  
故郷橋

世うー誰にける所とそ蒼蒼とあうそふ新又葉なるを  
池菖蒲

きふともあやめくうー世の外にをむは乃宿れ池水  
橋五月雨

不月あま人のゆきこちきふ幾日絶く後ほくすのれ橋  
深夜橋川

ぬるれよのやうに心れうひ松い世の月とをむくのこころを  
寄夏草

川流やうに流るは清く水乃緑とそくまける夏草

樹陰蟬

風よちる木れ葉の露もそ蟬の世の亦るぬたしひも  
川夏夜

湯後しとく涼し河風くうれ世のちりもろみれ  
秋二十首

新飯風

兵竹乃一夜は夜の風そそめてをねる身に世秋の初風  
野外七夕

風そそれを望もうけたん大川おれしる程の葉れは  
新萩

住しひと人を新萩の秋風よさうするりのを萩れ一村  
浮女布花

秋より水辺のあやと秋一をのほくめうらなうら

思秋

秋のあやと秋一をのほくめうらなうら

清似神

秋のあやと秋一をのほくめうらなうら

戸外権

秋のあやと秋一をのほくめうらなうら

苦涇露

秋のあやと秋一をのほくめうらなうら

虫怨

秋のあやと秋一をのほくめうらなうら

古渡秋夕

秋のあやと秋一をのほくめうらなうら

松麻

秋のあやと秋一をのほくめうらなうら

薄暮二鳥

秋のあやと秋一をのほくめうらなうら

月映秋

秋のあやと秋一をのほくめうらなうら

禁中月

秋のあやと秋一をのほくめうらなうら

兼唐月

秋のあやと秋一をのほくめうらなうら

月前遠鴻

秋のあやと秋一をのほくめうらなうら

月前沙客

秋のあやと秋一をのほくめうらなうら

月乃我頼るゝて誰をも友とす一くむ小夜此中山  
接衣幽

不のうねる喜半ふきく一小夜衣うつとも風のうさきさる六  
紅葉谁家

止むやれあつるを此色えん一く木正清即ち此庭此紅葉  
澄秋送秋

少訓一長のうさ六の夕娘も名残乃入あひの一名  
冬十首

時雨告冬  
核此乃ぬるちうく志くれきぬきさうりやといぬれ一

冬落葉  
冬落葉  
冬落葉  
冬落葉  
冬落葉  
冬落葉  
冬落葉  
冬落葉  
冬落葉  
冬落葉

樵路霜

けうとせそ海を去い來れをれちう一くゆ一霜ふく此山此去一道

冬萩雜曙

板石より海のささる一く萩のこれぬる光を待よ一く此

汀氷

志布志上は汀の苔生す一く氷をむ一く庭此此水

泊千鳥

冬に一くそらをれ舞もの波松即ち一此月小千鳥を移

霰残後

冬に一くは徳波の栲玉即ち一まきま乱く一後もつ一く此

逐日雪深

冬に一くして日比一くま一に松竹葉をちめり一ぬ庭の白雪

向爐火

冬に一くもむ一くま此心此一まき火を移る一庭の煙火

家々集巻

九重此内外もかたがた集れども三十一此書は乃を編して

恋二十首

寄月恋

月もより福や乃極之書いりて又今宵もむらり月哉あつめて

寄雲恋

立海の乃ちりしれそ人かう之はせりらそよみねごと

寄煙恋

ほお又才の煙やれり人かひもあつてやまの一人乃はれり

寄家恋

そいふも一恋ちり初まつの中よあす雲がむを家とちり

寄杜恋

小顔志れらうとくすも初れ来とくよ出さる人衣よの束

寄江恋

えりしあまははくののをいよとく初めりてもむむとく

寄瀬恋

荒えし公托をよむむとくとも名くその瀬れ名トイかろとく

寄原恋

面影を草のよふえんてしりり初分まらふと武さし程の原

寄猪恋

百葉にむらり物をわの初もうく初麻の者もうらまは

寄山鳥恋

山鳥れお涙悲初尾乃のけい初にそひと魚つる中の月り

寄蜻蛉恋

とあつとも人か志しれやはきこしそはうも初つめらるる花

寄浅茅恋

うま



いづるれし人乃むれあさちたにふくもあ乃神ねりけり  
寄海去志

波もたれり胡の河や深き流るるてふ事ふ所  
寄活繩志

ふけりあよ人とあしれ神ね繩のそれ神さしよむこと  
寄織畫志

折神ぬかりひ入のそはくしひも流るるあしちり  
寄掛楯志

人志まにひひしをいほくうひひの竹巻世たりん  
寄木綿志

末江おむらけられめやゆふあさむさふ契りかむ心む  
寄答箕負志

人志けくろあふ岩のをうさかけてりさ人志のまもれ

寄及挿志

誘ひる風もくれれきとあなう花のうけれ神のうら  
雜二十首

社頭曉

柏なれ者もつえく神垣やあふに春り流るり火  
古寺胡

関屋晝

と七ねうけもこれあさきよめ法の勢はるうこれさる  
山家夕

田里夜

蛙鳴なり海あまう川流ひてはらけ敷そふゆとの一む

窓牖欲消

幾交うをうりとううとううも又歌うとくる於窓牖灯  
軒忍草

いみしき心れ種たりや古き軒窓又生初を無  
門松

世にをむく居の春うう門ちうも本立をく初る松の一本  
砌雲

うさぬ友とこけりふうう極くをうくさむ初の雲風  
濱楸

淡ひきれたあひまきり幸波ちうけうはりの浦のま砂地  
林葉集

さう老めいふるれを山人と婦りとに流るあれ志う集  
窓林鳥宕

ゆりても初うにさくむう鳥うり此林の枝やあうまふ

晴後を水

うほり村西れ流うて末妙もとうく水の去くまみ

磯波

君解くても花咲阿く磯屋窓はふかけくを流る白波

名不勝全

いさめりうれやをあううう流う松乃波乃おけふの

寄車神祇

初るその神と交むけ小車れこれとハゆめぬ波のうは

寄鏡秋教

これゆりもふしとこれえん流えハ佛堂人色たるううう

寄舟毎常

人の世をたううこれえんも舟のうはれ流の流めあうま

寄弓矢述懐

本末又んおれりぢを梓弓たりにぬうに身をかかれぬや  
寄 園祝言

うんたも下は岩ぬを志めをたぐ神代のもれぬを久き  
百首

春二十首

立春

老の所もききさるるせれく本末ゆる公や春よのめやうん  
鞆中五段

きのふもふふふし説のふたりもめらのみ海をうんくあめら

摘み草

浮水よかふれをそれううううと福をけふんゆら草や摘み

竹畔残雪

垣根よかおきした竹のそのすくみ本葉さるりと残る白雪

常列

窓北軒新堀乃梅よりうううう窓北よりぬ常列しよ

梅盛

立枝めらつらめら色れ砂ふうううう梅の花さううなれ

隣梅

まもれら垣乃るれらふ咲梅はるに香きともは海よりきき

河柳

河川乃水の糖とめちをひてなむを柳のえられを風

春雨

やうふれよれいしんはくせ花まるはの春れらうめら

沼春草

里とけらんぬすにやううれぬらふ春はれとも川人をなま

宛

後をばばさけし物さけし人乃の此花ものとうめり世り  
さ不娘れ事のの神みほくそもあ中りて白ふ花の春う勢  
され数もあめれあ乃人の世成をみ忘れくそそやハん

湖海鴈

おとの者乃云くくもめても等軍み水海とびくかりや坊らん

春月

物れあう春のおとそ事世しとくりれとそそ秋まれ月影

春曙

云此葉みうくらむ物のを事白く山乃と秋乃のけりあめ

雲雀落

けましにや、夕道一夕をとり事あるそみ今や落く世

離草

荒をほす垣根と春此つ不きれ色してぬ也み白ふやうそ

山躑躅

山と今松のこころうりう思ほし物乃春めめしこのこかこ

鶯春風

誘ひても花をば枝みきふらあ、春成をくりて山風をぬく

十友十首

卯花

月影の光成をて夕暮れまうれを山やさけりうの花

郭公

きけはなびすく一勢と志くはれおひつぎをぬ山郭公  
いつすそも寝みかこころ時鳥こころはふるとききくはつさう

橘

悪へや身のむらうそま意しきに美世をうけくかちう立花

葛蒲

露をうけけり乃阿やめ礼を阿ひて色も涼しくあり新風

五月

五月の末

もろもろ枝々葉のささくぬ古葉落きふ竹乃くさむ

照射

書物ぬきりにいさるのささくや秋をたまきそ秋をささ

明後麦

ぬきそふもさそれ涼き起く乃新の玉しく麻友のたれ

夏月

月八先おきくぬちくくぬんそもき水くやくぬ志の、ん

六月

夏もちや二千のころせ乃海板川さちく涼き波素志の中

秋二十首

早飯麻

葉も木とゆきまつれぬけさ八先あくと麻を離れ初風

笠簾萩

多るる新穂乃萩乃り夏と結ひ之ぬき新乃守はく

忌萩

新志書と萩咲比々是れ名乃性来れ人の袖や深く舞

女布花

一本りなをきもそ女布花乃く種大粒の風はすむく

古初穂

花は地種とある庭よす秋とて立陣うて誰うはむす

新涼

う秋乃新と八はちとさく種よ老乃候と也てむくは

旅宿虫

誰をうとてなげしん古れ髪をぬり我のとつまる葉は枯り

松 麻

麻の喜松山お海——をひきて社堂備し此流木のきき

娘 夕

うねりとおしつ乃おおく又なるめまわりの秋乃夕暮

秋 風

そとれたる葉木も今も秋ふく志ほらちうり又山風をぬく

月

嬉しきも鹿のうねりさもんる人乃知とつころ娘此よの月  
をとちる身を忘れぬる月めをうらると娘のうねり

朝 暮 鳥

小うらほともうけてあり一層も雲のともそまおひれれん

濟 音

幸濟や波を流れく立寄り面影うとれた川の——とせ

海 邊 菊

位の波をせうを松陰りお世をわくもふ君れ白菊

閑 夜 接 夜

吹きほらち——も流るゆも夜打寄り——老のゆらぐ

故 郷 鶴

高田乃野風をまきこいし流る此をや現乃——

紅 葉 溪

高田乃野風をまきこいし流る此をや現乃——

笑 江 梨

笑のこりゆらむらもそひれす——紅葉もてる所うらめ山

暮 秋

誰うあおれまきこいし流る此をや現乃——



返しを左沙りし一王位と成り又清と久しき事その玉つさ

取 意

世に之を神の志つていほして海の外又多岐なる一老人

を 意

居てそふ一幾年月のあふも人乃心の外也とあは

一 厭 意

う此方をいふとふちひ地程り又立ゆりて志は程を意し

深 意

元輝乃好きしむう一此小夜今此のふみかふるおも

意 意

落とるさうして志とて悲草りてさうさあふをさうと

後 意

今いぬの所人も形の中後とるさうさうたさふの系

寄 震 意

奥ぬうの心をもちるしとるさうさああ痛てを此中の年月

寄 忌 意

云より神の枕うさうの月影をさうさああ思ふさう先舞

寄 池 意

う一月あひひささうの地もさうさああ出さうさあ

寄 里 意

うりまにたう人も形くは阿まそ落もありひと深草乃里

寄 草 意

あま摘るさうさああああああああああああああああ

寄 梨 意

あふたさうさああああああああああああああああ

寄 鷲 意



所由一そきこつを流きをりもむとむりハ祈いと書誘ふと念  
斎松虫意

かくそ此の意とき之れは後の世に人すら虫乃言ふや明女ん  
斎布意

そこれの意ふの細布裡をこほむ海乃玉もあやうす  
斎枕意

きえ祈ううそは枕み誂てもあひううそ人乃面敷  
雜二十首

一校はうやほへむ色着うそ人み誂く法乃これう  
秋教

身を老ぬわうきあはれ祈是ふもなとおとらぬ若れ世中  
朔

葉乃唐もきんわはれ長うそあくまハききにけり思頼

夕  
ほむまうつ澄乃初きとと流より入日地名誂きゆらき

山  
年波もうらむいり一万代をよの齡乃糸尾老山

時着ぬ言根乃若も家みんそ花みきえ人んそ花め山  
めれすもうらむいりうそ公これわりの山を花よおあふよ  
関

都よりけもゆらも神ちうそと美はあえしわ坂の冥  
松岩やをいゆもさそあひやう公をうえんそ川乃冥

故郷

昔よあうとあうあつそ思美生頼新駕もあうりなれす  
山家

住とも初子哉いさみおとありぬわたりうさ先の采乃うりいふ  
田家

あせほひ稲うりともひうはつきて年たつ秋城うさ家く

竹

世中みおむ竹もい君とありふけいぬうー園乃異竹

五端

お取つても家みそくはくホううをのうみ年や松あうう端

世屋

なうめやはいほをいあうとも雲浦うー入見ううは沖は去つ波

漢

ふるふる地みや敷そのぬ草屋深まむ星かー海士れ漢火

後

るしうみんうそ去く孫えて我おみちうう後もあうもり

懐舊

所めむうーおひおとくも今世みううりなくさむ友くみも解

述懐

世にいふ家みと去るも立陣あり人こ去てぬおをうすや

祝

今そけ性来の人とやと必やたさばまきた世と乃てん

百首

春二十首

都鄙立去

うち日下辰那のこころ大さうう云ねものとうみ去やまらん

子日催真

春よといておを登るみ川松乃こころみ海に神れい落く

連累胡盾

陽うらまは月半もおとろく——片くはるる日の中うとせむらと物乃山端

竹亭聞鶯

祢々るる竹とこをそれい宿を阿あくれよけ鶯此聲

深溪餘雪

春雪をこ深谷の歩とけやそへ海くうち出ぬ波のこ何くれ

水彌新菜

叶もはや分は世々く——目のまな歩とけゆく河つくの里

寢足梅風

此にそ志むすく明やぬ園のこれ云す求めく風ぬ梅く

遠浦春曙

忘れぬ難波乃三の浦のけくあがりあくむ波のあけぬめ

幽栖春雨

人をもぬ歩芽う庭のあくれもこくりにうる春雪のく河

月前海屋

聲くしてそれとも人此喜此よのおゆる月夜又海屋縁

樵路早巖

山人のえさもあ此下乃あやそくひをうらあ移さくこ

蜜柳藏掃

をそねく誰うこくり此柳陰い海く——乃うら海くいは

對花耻老

免つましもこ此毎あ少まうけたをねああ木の極老やいじん

上流花客稀

浅うぬ人乃をををちりてわくうまうまやとのほれく

晴天樵線

風うけくこく——を此糸ゆああ霧の長ぬきうとほく子

雲萑浦霞

いづこもききこえりてのそらもくちるひとりの鼓もくとて

雨後苗代

ほろつ苗代もあせらぬいふ海方一ふれ多妙り

滝下菖花

白妙もたれむらさきのそととく滝に震みうは菖花

歎かき露盤

あふれ色々さひめ下はしいぬもくろ乃山吹のそれ

惜春非一

乃春乃あけり別も長一は方の不しくみきふや打ん

夏十五首

山家文衣

ぬき之くも涼一山はと母ははとをねら麻の小衣

卯花仲播

植ほよとふりてふりて山は乃家をめくろみさの卯花

夏中郭公

あつらぬくさ夏啼きは現みかると思ふれ山はもきん

急播菖花

新播るる花をたかほりきぬむらひ思ふ夏乃花り

古沈菖蒲

あやめいこひきよまをれん正むも久しき宿の比あり

清菖早苗

小山田もさねともあり花をささふとやし乃陰もきまて

弘五月雨

河りよほるく鑑ももゆく苔も括やもそる人又目苗の

荒川初暁麦

巨正一そら麻友をい庭に浅芽みすしは花のそく

連夜鴨川

子淵河鴨舟のあふくちくくはく秋の女とたつた  
照射欲明

詩歌もやきしし此角のほくのまふくけもくはくあつた  
螢照水草

あひそふ池のあふ草に秋のそふ螢教をく夕やこのころ  
溝蚊遣火

芦垣乃をわくあふつた館史にけ宿もくく蚊乃替  
遠村夕立

風もやき夕立をくし位右やふ深里小種又くつむら雲  
樹陰納涼

夕日影さすのころあふ秋も神もまきくく去れ下る勢  
淵菘和夜

うたもあふ北津夜あつた川崎のあ嬌もあぬらうは

秋二十首

初秋胡蝶

小笹系下にくく秋をけきあもやをけくえはく人

若織女衣

織女乃をりし夜やをれあつて川あまう秋夜若

萩風似雨

夜もあつた神もくくや深きく雨をく子この萩乃上風

萩花移水

浅うあ花のあう又小萩系下あもあまをくれあ

酒坊淫友

誰う禮とあつたれ時あつたあつたあつたあつたあつた

草花久く

むらさきの夕あけを嘆む乃 整へられうろ 禱とそらふ  
槿 一日栄

朝う布をひくまのよみ 誰うえん子乃 ねと泥阿る世り  
吾方海山寺

禱のきふ 安母竹えんく 夕吾方の立うられま 岩の山寺  
田上稿書

秋とにんせ 日けく 小山田忠いふと びとく 以育此稿書  
張后竹虫

一 次うろ 小笹此稿書の床おやうり 虫もなく  
雲裾初原

横重乃くろ うめ 勢をきくそあて 人々 ばらぬ 原此 一 行  
四 鞠中 遠麻

月とくや 入 盤の 蔭か ぬ 花 ぬ けき さま けい みの 勢

月前幽情

策の三 夕き 入 月も 公 阿 基 也 苦 乃 寺 あり みの 蔭を と ひ き そ  
老 後 惜 月

むねま 月 けし せき 人 山 裾 ぬ け ぬ 月 け 身 の け ひ と せ  
水 邊 秋 夕

海を 舟 けし の 山 乃 舟 けし 川 け ぬ け 筏 此 暮 せ けし 記  
左 口 盤 分

うろて ぬに 菊 也 け け 左 口 盤 分 吹 け 形 也 け け 記  
播 衣 到 曉

くそ ねう けし 秋 乃 秋 乃 女 嘯 け け け け け け け け け  
對 菊 延 齡

老の 彼も せ け け け 昔 け け 齡 の け け け け け け け け け  
紅 葉 勝 花

小車此より人乃幻平之下り山地りみち雨を志乾  
鐘聲送秋

入おの鐘乃初ききまきとれくちり城の石と鐘ありん  
五十五首

松上晴雨

村をれをの松みいりてゆひりきつまてりあきめを  
落葉窓深

小里を初ききき一みのくけく窓みあつりゆの紅葉あ  
寒樹文書

あはれれしひはをりて松をみみ松をみみ松をみみ松をみ  
あき草終残

吹とせしゆの本れ葉の植根のこおんあつてはをみ  
禁庭夕霜

友人乃好ふくつ乃多きえんく夕暮るや九重乃庭

氷用細流

あきまてもあつるるあつてあきまてもあつてあきまても

猿泊千鳥

とりまのちあもあつてあつてあつてあつてあつてあつて

舟鳥知主

友人乃あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつて

無散音破後

老ぬきハいさしきあつてあつてあつてあつてあつてあつて

連日初雪狩

物衣をふりてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

雪中を空

なひきあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて





舟をりし事も去りし神ありて尾をうしにありしわら

寄木一厭意

山よりこぼれし水もはらふて朽木に松木川人うらむ

寄鳥御意

ゆきとてはほむの葉み求むともしひ云糸のうひやん

寄黙取意

閑書れしちねる初んし思ひてはやむむたみ形まより

寄虫切意

意しり人合れしとハ云哉むのきまをうけりし即世ゆり

寄筆別意

殊る夜の月哉おの志くのみまきし後ち時をうり

寄糸恨意

ぬまもあくうらうらとてその繋りか結ぶらひる此細の糸

雜十五首

洞戸雲霞

不のふも雲しりあめ若のこはねゆやうて雲そくはか

村々細

絶くみんあそくも立きしりいぼ雲のまや山乃木くま

寺正中澄

ちまを花より月けりては世の若友ハ思ふともけり

寄林鳥宿

立陣りおし秘くはけりてや若木林り寝もゆへぬ

寄海濱火

風そく苦みの糸うられんとも六敷さくめえぬ波は燼火

遠帆連波

足るらうちふし帆も片帆も川りれ枝も浪もちうめのをう

夕陽映瀉

枝をくぐり松をくぐり夕陽をくぐり夕日うつろふは暮山

長河似帯

帯をせよ細谷川よりけり水も清きしの中

猿人渡橋

今のこり昔をたづねて猿人乃渡木段をぬき野をく

披書逐昔

心もついでにけりし人もあれおいてかこぬきの暮

泔事跡に

立陣のころもたづねしけりし跡もあはれ母かたをく

夢を同爰

うらの暮をぬれしめをくはけりし跡もあはれ母かたをく

逐日述懐

ゆきふしを道と後世にわかれし人なりともあはれ母かたをく

物消是非

をわたり物ありしをくすくすふしめりし世もあはれ母かたをく

社頭祝世

云世のさきとをくすくす世の春を祝ひし世の例をく

百首

春二十首

山早春

濛の春松吹風も世をくすくすありし山も春をくすくす

子日友

松をりもくすくすの子日も誘まきく世をくすくす

海上晚霞

くれまきくすくす入日の跡も松をくすくす

舊田楽宮

幾年もきつはふらきし古楽より春つと申をむる宮此

垣あり乃少の云まふあふりてまきし播を免ぬ春此り前

云をりも今入の冬をくりぬちぬねみ沙る白者

誰皮はの梅れりゆひをうりてまきし梅や春の家つと

神もまきし梅の段中も河橋の注末みなしく春柳の系

ゆり入も新柳より春の月むらう生をふ柳のいをりて

末をく新柳より春の月むらう生をふ柳のいをりて

春曙鷹

あけらの春路より春の月むらう生をふ柳のいをりて

ふく世の花のまらり此はよりも細と花をむるまきの娘

吹ゆのあふゆまき世を春をぬつとをまきも此と春

咲ともうひおきし乃家梅阿をまきねん人のとく

とそめふはなれきうんをう所もまきし高き花のまき

阿つてうれまきまきしとち春路より春の月むらう生

勢

落花逐風

雲蔭之落

けしきをこれ秘すわさそふ夕蔭に落る心せしりハひけり啼こ

水色苗代

せに个苗代もたあせしそくあしぬ岸より落る蔭にせ

歎みろ露

胡夕ふあまそひくさ花の八重山梅を枝あけぬ

芳春の菖

末をのく芳ふもかれは春城くむくまの菖花をるあひ

夏十五首

新樹風

あーても誰らううん甚とくわうと涼し花のやうきを

里卯花

布きんを山里とあうこれ恒縁つきにさけり卯を

杜郭公

おとさあ志り妙く人山をき整ゆれあやまらるやうり

郭公何る

そねうるとけもきこめは曉のうねふまきれ山布乾に

池菖蒲

あーいそ川あひこれあやまはれまそひくまあは池あ

對橋同昔

いあくを思ふ乃あも打志りしとひとら神神イあはるる

五月雨晴

うそあう日敷うまねるあ中をももくれ晴く又りあのえ

炭照射

う竹やうりしをさのひとら麻のふけのさねまほる命を

庭夏草

庭の面ハ碧とちろろ葉は紫とくは花ウケトキさありき  
夏月易明

隣蚊遣火  
下くちろろ葉をこられやり火の煙をくそぬ者の中うに

雲似玉  
月水城思す曇ち夕やま涼」さすねく玉をちりぶ

遠夕立  
鳴井乃暮もとを不村雲乃立さつる屋や夕立此を

樹陰蝉  
あつき日空をほみ屋くそ鳴蝉の涼」き静も春の本乃本

納涼忘夏  
人とはく家そ秋もいり」あつねく涼」き雲の下陰

秋二十首

浦初秋

正手ハきそおのひやあまをたそせ梅立以乃は女浦風  
セ夕

織女の笑りハわう」大河浅瀬白波多代々うても

萩静鷺の夏

そこと所を枕巻後ハ誘ひてをさねう」静ら萩の上風

萩初水

咲を流の影をう」そ坊水も世をう」此静流此玉河

唐似神

帷風の尾花女と海も白香も神く静手くぬ玉う」そ

雲間初鷹

横雲のうりれ」静も山嶺く」それう」海う」鷹此一羽

田家秋麻

小山田の鳴子も初も少るれどと糸糸局をたさるのしる

露底虫

あるうらなひを清ちの糸糸くまきか静か志ほまぬ底の松

あつげ夕

あつげ夕の夕をいふとん花も海と志のれしる里

対山待月

いとうの月もほまきか別家生る松は此ぬひのこころ

江月冷

あつげ夕も静かとん井江や月すむ夜ま此昔久村立

月泪催

神のあつげ夕も月やん月やん月をの福を

秋月添光

あつげ夕のこころをいふとん院のほり秋を叶る秋月のさやう

独惜月

あつげ夕をいひくころは友もあまれ山廻る月月の糸

追搦衣

あつげ夕をいひくころは友もあまれ山廻る月月の糸

老翁海舟

あつげ夕をいひくころは友もあまれ山廻る月月の糸

浮畔鴨

あつげ夕をいひくころは友もあまれ山廻る月月の糸

菊久盛

あつげ夕をいひくころは友もあまれ山廻る月月の糸

思紅糸

あつげ夕をいひくころは友もあまれ山廻る月月の糸

音板紅葉

竹板のうしろの形えとわすれん人想さと身向て残る紅葉、  
五十五首

胡時雨

山高き出雲日影もこれよりるわく時多し風の浮雲

落葉有聲

紅葉も寂し後色うわくききこへ月もあこれ下風

竹岡霜

吹風の音はさやきこえこもこも竹乃葉志るー氷の胡霜

寒更寒

山も皆寒くうれも人思うまよの葉下に残るを草

湊家世

ふれと入乃みもさうと風走くこれ梅と昔の心あさう

總樋水

山陰やかけひの竹若く秋雪こけりく水の音つれもあ

舟月夜

夜ふもそれと酒も月影も葉をわさぬる舟のまゆ地

曉竹千鳥

走こひても書やははれる紙小飲千鳥独志と鳴るゆめのみ

河水鳥

河水乃浅瀬をこけり川へは乃瀬の思程く替ふをいれ

閑路書

鈴鹿山時多しそもより之とこちの閑路を音ふるあはる

音中船屋

本之れくあはるる紅れ家もくも音のあさひをえふさや

夕夜鳥持

かりきり 本北下乃乃海さきにほめ海のぬきりらぬの響

立のゆる物もやふ久くくも高年信と名乃とてとくま  
物色三用候

かろふも古なり 子大くくハ打うるあつきくむふうり火  
年欲著

今年を惜申す所 異所乃一と二に抄る編み候  
意十五首

悲泪意  
今更そ并記も之まの海川くちかひひくみ神我きうくく

人供ふきくくくくくく此面影成ると此にそとく物とてん  
終見意

水増のあきくはぬまの葉とてとくくくくく神をぬれ

祈難の意意  
立海の意きくくくくくくくくくくくくくくくく

契経年意  
かろくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

待空意  
祢ち年ししおひひぬうくくくくくくくくくくくく

来不田意  
去りいそくくくくくくくくくくくくくくくくく

返書意  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

不舎意  
何いふもあふくくくくくくくくくくくくくくく



宿在不安

そことしと互家なきは公阿そと宿うんぬぬ杖立於門

歎願忘

法もよに法もよ中も花をたほふあつまん物風を吹

耻所忘

かろ七色の糸もんをり及たれ糸もろうし地蔵の下草

経忘忘

面影をいつしつはわたりとれ具うひも法も神志はるる

面形見忘

形見とそこれと心ひの増後ともむむうし新法もそ

恨級忘

昔よりそそりし後と絶そ何ううらん云地蔵もなり

雜十五首

宿足鷄  
鳥をすれも今ハ社足のなるやあうしかひぬる老の杖り

古寺鐘

鐘乃響く直くけとけめうりのやれなきも家の古寺

閑中燈

船のふとも世のころるきもほくくとおしふ文光宗のとも

落葉松風

まひしさとつらともしりの物雲内も和なくまにむつ葉の

叢頭苦

とたのまもく心し思はなる昔の衣杖うふ身なるう

世無同鶴

夕老のむうもなき人たり月よ友よし初奇れ満落

洞戸雲霞

洞戸雲霞

世々海不道と詠祿と山道乃岩の戸ぬく雲やうら

采介海不道やうら山道乃岩の戸ぬく雲やうら

推詠兩  
松川筏

松川や下流の心くは朽如影のふくれもおれた

山家送年

掃く平ふも人も竹まのつううらむらむら山の住ら

四鞆中懐都

同く名おりのうらむらむら今半くま記都乃志はうらむら

旅泊波

雲凡地まをひてあゝ磯のまこの枕はぬらひまも那

性事如友

あゝのまをひてあゝ磯のまこの枕はぬらひまも那

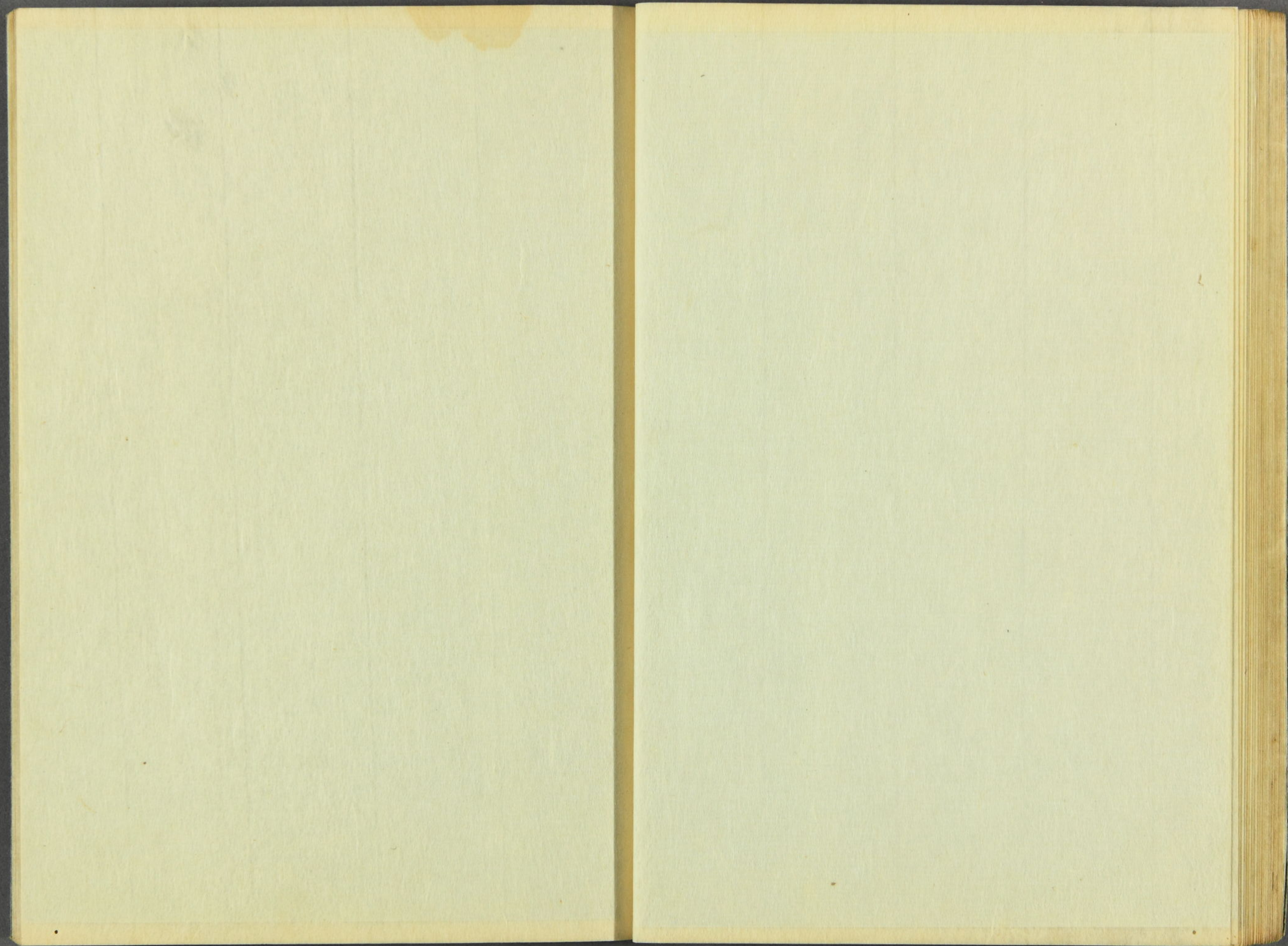
述懐多

今も河も記してはひらうらむらむら今半くま記都乃志はうらむら

寄神祇祝

ゆ来ををひてあゝ磯のまこの枕はぬらひまも那

中んら



三十一かみ子巻第十一

十百首和歌下

百首

春二十首

年門立春

名もも似せいのちのたのやそ〜ひふのひまをくれ〜春はきつふ

早春 雨後

あふ〜し君を此をまきのふ〜んつ〜やと松ふ〜あめは

子日松

二世の松ふり代を〜と毎尾の思杯の松〜子日〜てまつ

雪中雪

降るあそのま〜ゆる雪陰小破を〜け初ふ春の〜くひす

雪乃雪

里の子れさう、小登魚にほそねくをぬる此より菜をそ摘

梅風

い白ひ何つきと心一子此花さへ川梅乃しくう勢

柳露

立たりて神さう、小ねぬき柳も架さう海しくあそこふう

春月

そりしともしとめろ、元此多ふそくそそや月成春とされう

帰厩

去毎に花行れそ右つら忘れぬ相し厩やけし母

春雨

婦つきて淋さう、そふ去毎にう人もねぶ軒の糸水

寄雲花

かづきやとほふもならは吹流小淋り、おや花乃白垂

寄庭花

う花そを咲ふし、いとそあや夕暮るひ、ふほふ新花

寄露花

う花そぬをとりさけ、おあそふし、け春の朝風

寄月花

一時ふのれぬう、もこの中し、月の光さうそ、燈の花

寄風花

地さした誰う、うん春の肌を此柄く、やううこころとも

寄雪花

際すに柄の文を、けりねく木の本ぬう、花の白香

春田

う今、小苗代、お城せなうけく、春純山色ふ、うと阿く小田

河歎

吾輩河去をよめく 嗟花老う河ひうと 秋居此山吹

松友

嗟友八十年 秋去此花をうらう 志るひもなるを 枝うらうを

若春

花のうつろひの月 光をえきこえと 秋のぬきぬきのおれ 秋

夏十首

夕卯花

嗟花を弁花山乃 陽はさハ夕暮 ぬの記道と ぬを

卯月郭公

友きぬと初春 けりせ 時をよめり 又月ときうハ 夕暮に

夜之思橋

夕暮ふとぬむうも 思へや 園の現うらむ ぬを

五月郭公

時多きう一 勢ふゆふたり けりうらう 友のよめ

五月雨

石うら清瀬 河と見ゆたを ぬをうらう ぬをぬの比

夏草

嗟花乃 友山をうら 秋今もさそ 悔成ん乃 秋之のる川草

夏月

朽れぬとも 春と秋の中をうらう 程もを 此月のぬく

螢

光る記 春ともいふ 友のハ 螢とひうハ 本は 此志うら

夕立

友をうらう 友をうらう 夕暮 秋の 春もさそ 友もさそ 友もさそ

納涼

海初 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

秋二十首

初秋夜

きり半く、夕しそく、秋の夜、初秋の夜

閑居秋風

秋風のこころ、秋の風、閑居の秋風

野菊花

白菊も花、野菊花、秋の野菊花

夜虫

をたつ名のほ、夜虫、秋の夜虫

曉層

夕陽の月影、曉層、秋の夕陽

深山麻

深山の麻、深山麻、秋の深山

杜月

杜月、秋の杜月

河月

河月、秋の河月

浦月

浦月、秋の浦月

峯月

峯月、秋の峯月

江月

江月、秋の江月

山期暮

山期暮、秋の山期暮

海色接衣

海色接衣、秋の海色接衣

きけい今時秋魚をそ次乃備り万とよの夜葉やうん

田家秋寒

秋寒れをくそのかりん秋文く初り引ぬは書も重けし

野草欲枯

秋もや草野の浅芽又はきそ子種の花と秋とも解

庭菊

荒もそくふぬ宿かをぬつり山路はく庭の志菊

雨中紅葉

村町をそふれとそふに移ぬまくと移るあこれ紅葉

河色紅葉

春にさし花の流も紅葉にうつ海ひらう秋の河色

山家秋菊

山家も志菊とと海邊山里地垣下の尾花も移り

同九月に

浪あまをつあふ書り月月の移らる秋乃日秋葉

冬十首

初冬時

冬ふらるる冬しと冬れ山内の書ふやふ時更来りり

冬落葉

冬水はそしと冬之に冬ふまはりる冬葉此下ふむせひて

冬草葉

冬草花うさし此玉の玉落のるに葉はひさし冬乃秋の

冬條

冬に葉をわらりまき人玉舞玉と舞し冬教さるり

池水

池のさけの移り書るる冬は水も池に流るれ



みづ月

えし夜まの心あしきいづのるにふ糸沙くぬみれ月影

扇題

山川や思ふつ波のなほ夜ハをりりあきの立ゆりなく

行路雪

ちかきふふ世の古の流はきてはう整よりとふ人を稀なる

里書

不うと花雪は乃おもかけは今叙する吾に笑と神託里

果書書書

除香に流こそんく杯浪何る日教をきよとと年や水人

意二十首

思意

思ひ程乃着ふに去くはいうせん枕もこころいふ夜毎

見意

をそぬのりめこのかけくをく細々神こそぬくせ川人も

不意意

いしつも海りくく人よひ川を渡の流くゆきうる程

詩意

ほまぬさひ人乃の色ふして吹くひもねき屋との書せ

後物意

何半く程乃麻書子にうひぬおし人か着うころう

久意

こころくもおひおまひ公より幾年の流うくは返らん

夜意

立陣り程あそぬのめ人んころを程ついでかこころのひを

思後意

うねりの中を流るる水とて人志れぬ下樋の水の音つれはな

寄秋月恋

つらり人の心の秋の暮るる月もほろけぬ

寄秋風恋

吹風は誰かよき人か昔は葉も初秋のうらみおひき

寄秋露恋

我神くうきとて今忘ひ草尾をくちまらふ秋の白玉

寄橋恋

うけくさるる人か志しぬく家かそかへる後の浮橋

寄海恋

とめ侍人かえり海くうきくあまりの乃志くかれ

寄園恋

現ふはさも山を阿の若返ぬふかとうあうさぬ庭板園

寄心恋

おひ侍若成すれ給ふきくむとも様も形も思とく

寄夜恋

恋長恨くさるる一かへりもぬる夜をけまはるる

寄鏡恋

かたうらるるにありひのまじと鏡もても今ハ鏡とあふ所

寄舟恋

幾年か舟よりとほれあま小船あうるは神ぬくま

級恋

絶てそん中とも志すははくうらねはるるあうとそこいぬ

恨恋

うそくれくさるるをさくしめあそえ打いて人云のあふ

雜二十首

解

園鶴

鳥の居るにゆくは元の初りのことなるもさうな園の通ひ路

名所鶴

波をくぬきおの浦城をさるるをさうさうと月ふきるを唱

名所松

辛湯や松を一本むしりてく代く小粒をく人乃云の系

名所橋

人乃云に世に定活橋も海もぬ今六の浦れつきり

名所滝

花紅葉の浦れ山の春秋りうつあひうる滝の白系

名所濱

春秋もくあひつきり松陰やうつもりのぬすさうの濱

霧中雲

うぬりえりささうり六坊末の浦もむと川まかふ志く雲

接泊

舟出する仲は志存あひうる居れてお所渡り暮成すの

渾舟火

蟹小舟の浦れ系のをさうり浦もぬくもは渾火

眺望

夕日さした末登城これと一村れきうりよ暮あむをせ山は

右の雨

暮るる暮り初乃常も悪くさう暮るるはくふるれ

山家嵐

住ちれぬい山すさるる新瑞を秋雲の浦れもふしあひ

田家水

暮むる門田のむつちがれくさあをり水の暮も淋き

曉夢

夕夢は現の夢とてさうもその福是の如きもの  
懐 舊曲

思ひてもいふにむかひの年の結く芳成りけり  
寄夢述懐

花鳥はいつくも夢とて時のまにぬ糸よきとけ  
秋述懐

年毎うらみ海ひけり老の年とてさうも  
神祇

詠人乃夢のむ陰わす一夜松一方のぬ神の  
秋教

夢の席も法乃夢の夢のわすれぬ  
物祝

子所田の年の中ころねるをさく穂るさくさく  
百首

春二十首  
初春

神代より神代迄乃の法成ゆさう返す  
初春 二首

和きそ程春めゆるり朝日新出さる根ふ白く  
あすはは後山陰とてれをさく波入合の詠とてめ

夢ささるぬ花のちこ香成る初春ふこめて  
春 二首

海布とてさうもはぬさうもはぬさうもはぬ  
若菜

むねまの好風を重き物なれば垣根つゝひよめ草をもと

梅二首

掃

秋萩乃色はうつぬ雲深乃袖小しと梅も春の梅も春  
かほ香はほきぬ抱うと流しとふれ吹と梅の志を

柳

一方ふしきもそは吹らる風城はくも春此春柳

春雨

おりに初の新の春をきつぬくはもさしき夜まの春を

帰原

いふをれは月ふそさうしり子の花をえきとて梅の初春人

花五首

さうぬ中もつと花の初人春の好山と神仏つゝ初春  
あそむるはこれ初の花をとりと梅乃つゝと神の山

春日月  
春の好山と神の好山と梅乃つゝと神の山  
あそむるはこれ初の花をとりと梅乃つゝと神の山  
あそむるはこれ初の花をとりと梅乃つゝと神の山

春日月

春の好山と神の好山と梅乃つゝと神の山

藤

松高くあなれをふうりても新をさぬるはの友波

題

笑花をさしむとぬ山吹乃何を権少の生初春舞

三月

春よこれとあそぶ乃春よ笑花乃を春にめそし春の目教也

夏十首

卯花

月名の花枝夜ふ咲花のあつとそめてれううう一やと  
郭公三首

うさねを彩分いむ時色きこぬくぬくを山婦うくと  
郭公鳴りあ枝をきよとくうさけられた月もあつと  
なれぬともむういきううをう身も福是うひあつ山郭公

夏月

まりのぬる本の房は月ふ秋なりも及うとゆされん盡一は  
又月面二首

日影を淀乃川波をよめて澄来も流所あつたのは  
ほーわひむうう重采れ志一毎に晴まもみぬ有夏の比

螢

とりしふ影をといれと夕園に螢とひうう谷の本くれ  
夕夕立

夕日影を不なりして沖津風あきるひふ夜れ海つ

納涼

夏明けう夏のきりたの来あつて木の下陰を秋風を吹

秋二十首

早秋

けむ傍をかひつるううんあくにきて身行む舞の初風

七夕

て川ま砂城杉ふむとそも星地を遊遊をほぶう

七夕後朝

まきかきうそ河清を海うう地瀬に神代はや傍うん

萩

所のふふらけくおのハけやまは萩葉禁れあもをほうやん

萩

文城野や分神の夕なりもくくつる萩のむすり  
萩

むうしをりいりて萩の葉は萩のむすりにてん  
酒

免つふとよやうとねを糸落あうむと萩の夕な  
虫

梅さうらう萩の葉をさう世のさうと虫もつ  
麻

妻恋の麻をさうらう人にもさうに萩の夕な  
初鷹

山姥の重吹さうらう萩の夕なさうらう  
月五首

さやき萩の夕なさうらう世のさうと虫もつ  
月影

一葉ちりて木の君をひ萩の夕なさうらう  
萩

去らふとをさうらう萩の夕なさうらう  
萩

月の光は萩の夕なさうらう世のさうと虫もつ  
萩

萩の夕なさうらう世のさうと虫もつ  
萩

浦をさうらう萩の夕なさうらう世のさうと虫もつ  
萩

をく萩の夕なさうらう世のさうと虫もつ  
萩

長月も名のさうらう萩の夕なさうらう世のさうと虫もつ  
萩

冬十首

初冬

娘まじりし久れ子葉も枯れそよ葉の花好ふ冬をきふり

時雨

風の上ふ阿つらささめたりや山めらうを散志れちるらん

落葉二首

あつてうれ花のなほしひ紅葉も世に秋さしし山風や吹

色く此端の阿やとむと苔の庭ふちりしをあはれおきく

冬月

本枝もをばく吹り梅ももね葉さうさふ月のうらハ

雪散

園下雪風の阿さきの玉ゆふすく雪う置れ後さうさうん

雪三首

山里人へしとるをこれわさ心の松もや死れ下折

ほきてうさ雪ともんは月影の晴くうやく家の白雪

何のたも認るにはをた年梅うときえぬけ所を君もすた

兼書

松の三れわけぬ書ぬと泣く今年も春よさうらうをりぬ

冬二十首

初冬

きふそおしひ入燈の初尾花あつ梅風く神の家かりき

冬二首

縁波めのきくさふ苦め志のひつはけハきせし下らあるとも

おしひ神の着ふもうさふ悪山志のふさう海かうこのこさ

不登二首 五首

年波のこさうさうらにいつせんう阿そその浦く神ぬくさう後



名も生る松を法蓮の寺に人々ぞもて恋葉に種やうすし  
うすしと世も逢坂の園もも家うらひ涙あふさうりり  
し阿久人のともを以て糸のよもはさうりふさひれれど  
末終ふ逢はんはと命とと定めたる世は形むとさうり

初逢恋

年月もむとあふさうりいすいとけむら中れ下むも

暁別恋

志ハ一と神月もむらうきにも志了ぬるれ勢よく

後期恋

今朝もなびうらうらうら面影乃残る枕も扱はこそとく

遇不逢恋

例こそ思ひもまてに増鏡りても方よ免うらあ世は  
こもいさく救も昔ふらうらうらと逢りかありぬの月

逢えたる其夜の夢を現少く今めうらをさふたさうりや  
涙をちびりのありしや面影をうら影にそとをさうり  
あさりき逢ぬの末の逢川ありひと志つむ例のありとも

忘恋三首

和声れしうらひも今ハあをともひうらうらえ便りあふさ  
うら影をうらうらうらうらも忘れたらふさあうらハ  
あひても其あ人のとらとも中誓ひし神のあふさ

恨恋

うらも誰のあふさうら影あふさうら影あふさうら

雜二十首

暁

あふさうらうらうら暁乃福是の枕あふさうら  
あふさ

任右のきしうを記神代より松をぬきふ巻ぬ云のこ

るや人世のうらふ一は有るうとてぬふあてり竹の姿を

山

うめ久世山より舟を白妙の若ばそく此富士の大さけ

河

後よりにのるうねをよふうかぬなるかれといひ云のこ

橋

おきゆき代をたむるき恵也へ渡るも安き本曾れ村

関

きふ安ふ八幸山をく越して公とゆらりくらの冥

嶺 二首

磯のひ波け夜ほかたをかくしをぬきの葉れあけさ

ゆ葉の山流をとくと逢人もはまあゆまゆいしふまを

海路

ほこおれ世のりや船のうづ波の上北流来はゆき海士の釣み

山家 二首

隠家と山あさくと世の人を捨けし師を守れとひん

はむ山やさる整の数を人ともくあふぬ神とあやふれん

田家

唐さけ片山をや一初とれく田面をたふ秋風そく

述懐 二首

こもまをこもき世まはゆらつあぐ法の道ふはまきすさうり

世成をむるこひうなるれまきもはふちるてふ身に

懐 舊 四

をう身の跡ふはまきとくふうるあまきこの人乃るむう

あゝねい



春の山吹やいづこをうきをきくはくくさるるの曙

帰鷹

一羽をうきとめたるやみ清をそとましくこきよき川原の玉つき

去雨

去夏みきもといけり山吹やうきをきりもあつらひぬる

岸柳

立田川きりの青柳もたなびきこころをさくらふ水の志

詩花

ふけしき地りもころもたれいづこもはなを花さうりぬる

初花

このふかありあかき村をを咲初ううききこの山

見花

地ぬきもあかきいれに梅の人もも花をたけふよこをこめ

花盛

春といふとも忘れくをのつらむのさうりハ長宗母をこころ

新花

かこみ今ハ行 梅あそころおもしろ中ををちころめ

歎冬

云北葉はうらみありを山吹もいとぬるもやうきをきん

池原

池水も色はふらそを思はるる松の志川をみかかるとち波

春

いつとら入日乃元北名花の春も春なりきふ乃夕暮

夏十五首

夏夜

朝風もあそをみめたきころもころも一袂や涼しきん

卯花

叶らぬ者ハ卯花を山里乃庭に植ふと白あけく  
侍郭公

卯花をてきくせて一う夏時多し福ぬよの公也  
郭公

きけんを成きう後やもぢるもぢるきう一勢と何とひきん  
郭公 稀

いけをすくへ供ふけくろくろく又月乃末の山布とまた  
右の橋

まを若きもひちつう一右のあけぬひを志つのはるま  
早苗

秋もむりや田むくた久も今一つとらんれおのりるまへ  
又月雨

誰さあをれんえとらひを記一際てもつきぬ又月雨のは

鴨河

卯のうまうむむひも志く波く鴨舟のひまらう返れん  
叢螢

くせくうらひの種を忘れまや志をるるま糸うまはく螢  
夏草

まをかくかこそすくとにうまなも夏草は草志けきうは  
夏月

窓ちうれ竹の葉ふ分の内さうりうう月の影の涼さ  
夕立

むく香れね者ときけハ村のすに風さそひくく夕立の夏  
杜蟬

神の中とまの志め縄くう返一由うけく鳴蟬の泣き

復後

今きふ河をさしつゝの復川は乃ぬきや麻のうらもな

秋二十首

早娘

なふと解く衣はうらう涼さし時ふ似ぬあきの初風

セ夕

星倉羽をさしつゝぬき髪りしをけや初き人鶴のさし

萩風

花ちくく恨をききてあも涼き風のやうらう乃庭の萩系

萩系

浅うささつをさしつゝは志萩系をささるあきのうらましやハ

女布花

雲深の袖ふあしつゝ女布花あしぬき花乃もちこそ

せめ

夕虫

う出さく夕虫をさしつゝ鈴虫をさぬ乃あしきさやうらう

夜麻

なす竹の夜をさしつゝは初人乙袖介りつゝさしつゝは初

初層

和うれくハ清とびたりつゝ雲井たりまきあつゝうらま

秋夕

層

末のあふれ末のあもれをさしつゝは初さぬ林の中ふれ

山月

むしりたりまきあつゝ初月あつゝまきあつゝは初さぬ林の中ふれ

野月

表あつゝは初と誰うらう月影照は初の花形は

河月

秋の夜は光はさうく玉川や川上とびくは光る月影

江月

さうしは乃入江の草を波立ててぬ玉ちる秋の月影

浦月

さうしは乃入江の草を波立ててぬ玉ちる秋の月影

籬菊

菊は移るを白く金糸もさうしは乃入江の草を波立ててぬ玉ちる秋の月影

擗夜

矢草乃葉をさうしは乃入江の草を波立ててぬ玉ちる秋の月影

曉音

立寄不遠をさうしは乃入江の草を波立ててぬ玉ちる秋の月影

忌お葉

うけりなく葉も時をさうしは乃入江の草を波立ててぬ玉ちる秋の月影

庭お葉

庭お葉のわく山位もさうしは乃入江の草を波立ててぬ玉ちる秋の月影

九月盡

菊お葉をさうしは乃入江の草を波立ててぬ玉ちる秋の月影

十五首

初み

山の山梅は葉もさうしは乃入江の草を波立ててぬ玉ちる秋の月影

時雨

園のさうしは乃入江の草を波立ててぬ玉ちる秋の月影

庭葉

ちうしは乃入江の草を波立ててぬ玉ちる秋の月影

朝霧

日影さうしは乃入江の草を波立ててぬ玉ちる秋の月影

雪草

みちをこぼる乃草葉はあかしくともね根さしや春は待た

千鳥

小夜ちりりりやをうらとまきあきつらつとるをやめん

あき鳥

けりり涼き契りやうらばみはういそまねを極ふをう

氷初結

あうぬ初結まきさうと氷をきこらむさふ山の井乃水

あき月

あき月あき月あき月あき月あき月あき月あき月あき月

野散

あき月あき月あき月あき月あき月あき月あき月あき月

あき月あき月あき月あき月あき月あき月あき月あき月

浅雪

月影うそあきあきぬうとあき月あき月あき月あき月

積雪

あき月あき月あき月あき月あき月あき月あき月あき月

閑中書

あき月あき月あき月あき月あき月あき月あき月あき月

采葉書

あき月あき月あき月あき月あき月あき月あき月あき月

二十首

寄月意

あき月あき月あき月あき月あき月あき月あき月あき月

寄雲意



立埤り魚さつち中七粒あねやあいのせとさるり一例ふ  
寄 雨 恋

ともまねたさつち名形さつき中七契り一夜あそぶふさるり  
寄 露 恋

さしとれきえれ海物とあふも神々礼々露れ白玉  
寄 風 恋

あふさぬす不語しとうふの粒のまねすの風物成り  
寄 山 恋

あつむ人女四粒はくさふあのもかめにもさつちあるとも  
寄 閑 恋

なげさるれば返しさうも一筆ふ公そと傳りり一此笑さる  
寄 海 恋

うね中七魚さつちをさる海系やありふ心さつちさうさるり

寄 京 恋

なげき神のあふも神や海さまの下のあふさるり

寄 橋 恋

心のこころふさつち中級くわさつち久米の思橋

寄 木 恋

くも祿さつち人女形く年城種く流山うねれ女あてり松木ハ

寄 草 恋

月系れさつちさつちあふ人女之はさつち色やあめまむ

寄 鳥 恋

あふさつち相さつちこれれ女鳴鳥れ志さつちねまさく神七ふさる

寄 虫 恋

虫れあめさつちさつちあふれえれ系も鳴鳥あつちさるり

寄 歎 恋

し

終に成る人母の心けをよやうもとらう細くも望

寄玉恋

幾度う終りし心せめてもすこのあつ時をゆく玉の結

寄鏡恋

とりてをよもや恋のすく鏡はまぬる人母をたもみ

寄枕恋

枕もよもよとわたりしはうと此夜の夢成志すよつ夢りに

寄衣恋

いふに衣をゆきしはうと此夜衣をゆきしはうとこころへ

寄糸恋

よすん衣をゆきしはうと此糸の糸をゆきしはうとあひまをた

雑十首

浦松

いふに衣をゆきしはうと此の浦や夕波をむ松乃むく

窓竹

窓竹をももぬくし竹の影にふらもすもく此窓乃異竹

山家嵐

山乃名のありしはうと此嵐の嵐をゆきしはうと

回家

より控しつ田の面に中級く暮らそむく心この掛るこ

友卿

世に魚の影をゆきしはうと此友をゆきしはうと

海路

吹舟の帆角よめ縄一はち母子里にけりく魚く松人

四騎猿

波う心破心はくしはうと此猿をゆきしはうと

述懐

世の中、さぞせんとうなふのいひても、  
神祇

後の世もなほまじりぬれいせせく形む日吾の神の光り

祝

何れも今枝成なまぬ秋津清雪方ぬ海も波も志川ふて

百首

春二十首

果敢立去

いとれくをこれそ川乃し河そ梅も年ふ去なきり

山 五首

薄く山を去乃衣立そひくうなれも春は色なきり

海 五首

きく細のりさこそみえ孫めもとふに葉うとあつ波のたけふの

舊雨新知

梅半くう不ゆる谷乃さそとをりを海ひきりれ常れそ

沃着葉

あぬむ去のほみありぬ地く氷の雪まのりるをそつむ

松 残雪

さうぬまはさぬうす妙色清死乃面影よえむ松乃しそ

庭梅

ちそなり吹く風もあつなくに梅くまもちうた庭の梅う

野梅

奥くそをく去く咲梅乃そなりあひくそ野人の去風

柳 柳

朝社うそあうくしけつそ染をこころは柳をひくあけさ

右の春風

春風ふかきやうささの庭のまきそとまきこり

春月

山月くさきそとく涙君れちりさひなる夜半の月影

曉政厚

五時の月と雲とあつた朝のまははきぬく之は厚の一はく

待花

老ぬまの程くういそけいをたけ代えむるともあふぬ命り

折花

手しとをくうさふも極をぬる福山乃のひやちうん

見花

朝れ夕れあふた乃也まきに公城をうぬ家のまもれ

折花

よ折花やあをまもれ折花なるうささのゆきか

惜花

う折花て散りてぬきを初る花を折きまき山乃折

里歎

山吹のたうそいをぬきあめさたかにはるよ井の里人

池殿

そは池の玉のれ緑すそむくまきるゆきこれ殿波

春風

春風くさきそとく涙君れちりさひなる夜半の月影

廿十首

里卯苑

川波れまうとる川朝日山乃りの里りさけら卯苑

挿頭葵



清涼

をう此ふらひくこそ見えぬ糸清涼禁末くむさふ涼のまら

夕麻

今日たう山林くれそく田面たるう不麻を写ぬる

初時鷹

時鳥約え表すむいのるましく夢をめつ初うりのく

草虫

涼末く野之の草禁はることも色をれこそ松虫の夢

河原

吹雪を山乃あふふ大井河まものゆぬ波のうたき

秋田

末をく吹り風の色をく穂をくくくく梅れ小山田

禁中月

まの上や玉のゆきこれ娘の月を成るへくすこのやん

社頭月

あふ結ぶくくく川の月影みふる心れちりも秋に

古寺月

高桂山あめりりしてその月その障ふおまんときん

山家月

庵をき山下あのをつれと月ふすくぬる娘の表ふくさ

閑長月

世をまなくほろをを庵を秋のよの月をりおまこふくも

隣掛衣

打着をぬてそまうりり草炬もあつまねる麻のささるも

片菊

を成せく花の鏡やゆあうりあやひもくふる春の白菊

秋紅葉

清ききしむるし此の小山に花もなきに秋の紅葉  
谷紅葉

下りまき散りみちの色は光るに谷といひらん人みせしや  
九月

わが心もきよなるをきかきしむるに秋の紅葉も人みせしや  
冬十首

行路時多  
けりみまもころあつて時多きそころもともやき問の浮雲  
掃落葉

色く此木の葉おしをい比を流るも朽き谷のうけに  
寒草霜

百草も色をた庭のむ枯く木の葉をそ所の面もひねる

湖水

辛湯や松のあしーのさむる葉はふりくきに波もきよきを  
冬月

木のるり秋しー夜よの光りみか松をた枝の月影  
湊千鳥

梶枕着もいそぐこれとみ波のさしぬみよる鳴き声は  
胡弓

君が毎朝のふくれ乾すくたすくおとほをぬ野之の魚ひち  
夕音

鐘の音もろこと時へく夕音れ雲れ梅も積る去くく音  
夜音

むと玉の重さふ降つむ白音は月影はもささくささりり  
葉音

後とのとあらしも終は其所乃一夜もくろくそ去れ中植  
恋二十首

寄山恋

分りてなげにあらん恋の心おしひさおも悔いよん哉

寄炭恋

雲の影留まれば根のぬきともほのこしひ増くやせん

寄杜恋

木のりとお志づやとておていさくわふことともうくをるの

寄園恋

しの中にもくその雲城誰きておりし申ともぬくそわゆる

寄星恋

星のなれ流れのこゝ絶てくみもくもそぬ中れ年月

寄野恋

神のあゑふたりてもうくとふえや心田の山登の海芽生

寄原恋

娘成何くくもえん草の原むまにけ後か多つれもねし

寄河恋

飛鳥川らり中らけりまきこらる樹影の末や守のま

寄江恋

一夜ふ着もむせつそくはけや玉江の昔のおしひ礼まて

寄江恋

浮多れ志けるぬまれ忘れあきくそとそとわらひと海

寄江恋

神さくは海のおれこりみ生る草葉のいつかこえ

寄池恋

波下しき思杯をうけてせく池のくすもくをたそこの空



寄游志

紅葉あつた秋の丹波山さうして色もなうた神は遊はせ

寄橋志

流もよほりぬ中を公のこころひくうひぬき天の流を

寄海志

和川海のかう契りしひ作場のまらひまらうんを

寄浦志

着草ふんとぬぬの浦風に波うけぬぬぬぬをれを

寄溪志

わづらひしきるもいとくこころもぬきこころ候の波のぬきぬ

寄深志

血のうまふかひくをゆつ深と深うしぬを志く候も

寄溪志

ふきや入波あつても溪水とあはれく候まらうのとも松

寄海志

波もくこころぬをりれひなふ今と家財を浦の初しゆ

雜二十首

曉寢足

うりゆこれあつたの在と候是を候くううたのとも候

谷松年久

夫のうまふかひくをゆつ深と深うしぬを志く候も

山籬竹

杉のひくさるるもゆたうもゆたうも山籬竹のまらうんを

踏苔

ふきや入波あつても溪水とあはれく候まらうのとも松

草花同五首

和の北浦や昔名をたもつらにたはれ波をたもつらにたもつらに

羈中送日

友きぬし立初し娘の衣もまきく<sup>ちやい</sup>おろく秋風のゆく

羈中懐都

鳥の名れ朝のこゝろはさるる川むらう<sup>く</sup>秋のゆく家も寂し

猿泊主夜

されやおるし候しし海に松もき出く<sup>く</sup>人波のゆくは

海邊眺望

入日影輝乃夕小入るる<sup>く</sup>をたもきぬる候ちし海声

寄「愛」懐舊

月夜秋ともいそはるる人もこれの<sup>く</sup>之を<sup>く</sup>愛とこそ那れ

寄「志」懐舊

をぬきその<sup>く</sup>れ<sup>く</sup>る<sup>く</sup>返<sup>く</sup>し<sup>く</sup>也<sup>く</sup>も<sup>く</sup>つ<sup>く</sup>の<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>き

寄「世」懐舊

い<sup>く</sup>み<sup>く</sup>し<sup>く</sup>ら<sup>く</sup>ん<sup>く</sup>ら<sup>く</sup>ぬ<sup>く</sup>る<sup>く</sup>し<sup>く</sup>世<sup>く</sup>を<sup>く</sup>何<sup>く</sup>し<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>ら<sup>く</sup>る<sup>く</sup>ん

寄「情」述懐

花<sup>く</sup>お<sup>く</sup>糸<sup>く</sup>を<sup>く</sup>し<sup>く</sup>め<sup>く</sup>る<sup>く</sup>も<sup>く</sup>深<sup>く</sup>の<sup>く</sup>こ<sup>く</sup>ろ<sup>く</sup>み<sup>く</sup>志<sup>く</sup>す<sup>く</sup>ぬ<sup>く</sup>ん<sup>く</sup>る<sup>く</sup>は

寄「海」述懐

は<sup>く</sup>つ<sup>く</sup>に<sup>く</sup>を<sup>く</sup>の<sup>く</sup>海<sup>く</sup>を<sup>く</sup>え<sup>く</sup>る<sup>く</sup>も<sup>く</sup>道<sup>く</sup>の<sup>く</sup>此<sup>く</sup>を<sup>く</sup>む<sup>く</sup>し<sup>く</sup>も<sup>く</sup>何<sup>く</sup>し

寄「所」述懐

捨<sup>く</sup>し<sup>く</sup>を<sup>く</sup>何<sup>く</sup>と<sup>く</sup>歎<sup>く</sup>く<sup>く</sup>を<sup>く</sup>と<sup>く</sup>わ<sup>く</sup>め<sup>く</sup>と<sup>く</sup>云<sup>く</sup>れ<sup>く</sup>葉<sup>く</sup>も<sup>く</sup>何<sup>く</sup>し

寄「神」神祇

昔<sup>く</sup>より<sup>く</sup>色<sup>く</sup>も<sup>く</sup>ら<sup>く</sup>ぬ<sup>く</sup>神<sup>く</sup>系<sup>く</sup>を<sup>く</sup>言<sup>く</sup>は<sup>く</sup>う<sup>く</sup>く<sup>く</sup>し<sup>く</sup>神<sup>く</sup>や<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>る<sup>く</sup>ん

寄「鏡」神祇

く<sup>く</sup>し<sup>く</sup>れ<sup>く</sup>神<sup>く</sup>の<sup>く</sup>定<sup>く</sup>め<sup>く</sup>す<sup>く</sup>は<sup>く</sup>う<sup>く</sup>く<sup>く</sup>を<sup>く</sup>何<sup>く</sup>と<sup>く</sup>代<sup>く</sup>り<sup>く</sup>る<sup>く</sup>は<sup>く</sup>も

寄「水」秋教

く<sup>く</sup>し<sup>く</sup>れ<sup>く</sup>神<sup>く</sup>の<sup>く</sup>定<sup>く</sup>め<sup>く</sup>す<sup>く</sup>は<sup>く</sup>う<sup>く</sup>く<sup>く</sup>を<sup>く</sup>何<sup>く</sup>と<sup>く</sup>代<sup>く</sup>り<sup>く</sup>る<sup>く</sup>は<sup>く</sup>も

さきくはるれり末らりれりも公をわや法れらるる

寄院秋教

ふそこれちりけり母鳥や西ふむ之は窓のより火

祝言

糸尾や松吹風も静りりくを海つ代もく夢の心

百首

春二十首

立春

出る日の光もききハ海く玉の春もやうくそ空のれと春さ

山五候

三輪の山五候は春れ志く志何の枝もく之にちり

な風も海色も五候

風もけりぬくその傍もんそとと五候もりぬれぬく松

二首

梅さうぬる香も勢ふえそく花成心の春乃くそいそ

野若草

秋ふり花も友遊ふつのみにすく春れきく新葉をそ

梅風

誰里も梅のさうりみ成ふりり白ひそふり記四方の春風

柳

花のこり春れ朝風を起くけおの玉ぬく春柳乃系

春月

春立てる玉の光は掉姫乃春の神は毎月を

春雨

時夜もそめくう梅さき際まに木め春ぬ花のちく

改厚

いづしよりけきそまへ海に原はわのと海やわく成るん

早蕨

山梅を折志乾しの花をそなうく庭おもりゆるまきのさつひ

栽花

詩書乃何成とてと極をうんとそと洞の花さうあやは

君の花

草花ふと青月本流さくひ初とゆるる八奥の花成るん

花盛

ちとと以て扇ふ打き花盛んしとくわりまこれ初風

挿頭花

長宗何世をまなれや於人花成るしこれ神れ色く

花

おとく境も庭みりあき花をといふとやとふ縁ふまは

苗代

八束穂もよりうらつ原く梅をさうけのゆれとてまの苗代

歎

あま女と梅のぬりのと山吹をいそぬ色や咲たうめをん

散

咲花乃いつくは初まると多枯浦や名も世みしらく白ふ原波

草書

入おはるや法きとそぬ勝乃語をうたうみ妻や志くこん

夏十五首

文衣

あつこころの世みまうふるまきとそも同し色形るま雲深の裡

菱

詠人乃るるに菱のうらうらとてわくも清に賀茂の何あ

侍郭公

はまの池をたづねてゆく郭公のあはれを  
郭公遍

誰とてや竹の葉をさし合はせや  
高田浦

ゆるりまらぬれはまの池の  
橋

むかし今も池のほとり  
五月雨

おなじく河をひ柳の影を  
夏草

いづれはつるをたると  
夜月

夕立乃名所の高橋をゆく  
蚊を火

一と地母寺地ものゆく  
螢

さびを六つとくまらむ  
池草

をこれをもとをぬぬ  
夕立

村舎もやうとそまらふ  
細涼

涼さ六階はなれぬ  
六月後

をの波をしらさる  
湯板川

秋二十首

早秋

不うら所々をきりねは北山西とそ娘の今豹の初風

七夕

三川星の盃漱の忌悔つゝをなせうと記契りあは

萩

なて世の夢本は志しぬ娘の髪ありとやうらゝみ萩の上風

萩

幾秋も色阿婆や小糸初不ゆひのす勝の萩う枝

女帝苑

あうおま志くふ姿を女帝苑あう志りて時をたぬゆの

蕨秋虫

は比々整之の子種もあふれくゝれをむる虫の發く

初風

あは比々あまきく一雲乃公能くくもる初うら北記や志ん

田麻

小山田乃志く乃掛るはこれ萩もはほほれき妻く麻や吹ん

秋夕

あは比々あまきくの澄もあまほく夕暮淋一秋乃山星

山月

山ぬらまはれあまはる白衣乃志もあにむ月のかく

栲月

あは比々あまきくこれ悔つゝえんを六月ふこれあてれ栲立

浦月

うねくをりあひうけきや穠夜月あがし一を神の浦ちり

社願月

任吾や柔とんすまをかことき此はつひの月照る月影  
古寺月

白瀬山鏡の初きも秋なる此夜とつひわりの月

曉鴈

抱きよをの初きも秋なる此夜とつひわりの月

擗衣

待てよ人なきまきぬ小夜衣うらなうや月こころん

河原

如河をそこもつたまのてきあめてきりて秋なる瀬の岩波

菊

由せのうぢも菊れうぢひをきぬる色もぬりて秋なる月

紅葉

紅葉をそこもつたまのてきあめてきりて秋なる瀬の岩波

九月五日

何をとも秋の名秋と志すひを西ふ今日の影あつた

あつ十五首

初冬

何をとも秋の名秋と志すひを西ふ今日の影あつた

時雨

今日影くもりもつた時雨つ村雲落し冬のやまのた

落葉

吹風山何れもきん浪おれをを落るもこれみちに

霜

金糸もさる日影も消えりまきりて秋なる月影あつた

雪

雪をとも秋の名秋と志すひを西ふ今日の影あつた

冬月

春のこころあけ 親おやとやおとこのこころこころ 福とこころこころ 此はくきこころ ぬれこころの月つき

氷

大井川おおいがわ 井いををここねねるる 波なみののちちささぬぬうう 氷こほりののわわにに

千鳥

川がわのの水みづのの波なみのの上うへににととくくりりうう 福ふくととくくふふをを唱なええ

水鳥

友とも福ふくととくく 秋あき座ざややののききふふ唱なてて 阿あ川がわのの水みづををむむれれととままええ

細代

埋うめ火ひははををぬぬれれぬぬららととくく 云いをを乃のああ 浪なみのの床とこややいいふふををけけきき

炭石

友ともふふととののままゆゆととふふ 岩いわははののままゆゆととふふ 積つみるる 白雪しらゆき

庭音

ああままもも人ひととといいふふをを流ながすすふふもも 我われととををははるる 庭にわのの白雪しらゆき

庭音

ささるるののききふふととくく 山やまののききふふととくく 海うみののききふふととくく

炭電

表うらなりなりととくく 乃のままゆゆととふふ 煙けむりややののままゆゆととふふ 山やまののききふふととくく

炭電

世よの中なかのの福ふくととくく 此こゝににああららははるる 年としととくく 庭にわののききふふととくく

庭二十首

初恋

衣い衣い色いろととくく 乃のままゆゆととふふ 海うみののききふふととくく 庭にわののききふふととくく

恋恋

心こゝろををれれととくく 乃のままゆゆととふふ 海うみののききふふととくく 庭にわののききふふととくく

初恋



いふに由り今ハ初らん意キ一れをなすけぬ神のうら垣  
ゆり意

よつる露の露の露の露をそけたり友と神好くそん  
不意意

春もさうらめおはせいなねを若流をふと程をうまき  
賢意

ふりし空笑うて地ふも歎くまな雅意の川ハ剛胆を世  
意意

諸もに逢ふをあまはれりりしつらに松のうもあま  
別意

雲は名やわくそ空は志のたふさふ沙はきせぬ人乃きぬ  
後期意

わけくりしおおと名園のうまのたふ解く沙を云れし

を意意

おとともさういふとさういふとさういふとさういふと

別意

神ふさきりしをさういふと中ねくう魚くうう冥をんちり

顕意

為るれ下母魚ととおひい一は阿これきり那波のう紀は宗

増意

未終み名をやらううん溪川うさそひり神の志うう

偽意

いつられお世もあうくさういふとさういふとさういふと

悔意

うら返りおりよもさういふとさういふとさういふと

経年意

はまのなを思ふも種此二葉をり本も此松を年成りて

忘 意

公より思ふおふもり志しに忘る人とりおれてやむ

思

烟とも立のやそいつまそ物乃さひし脚をさる人

片 思

貝はりのを海士とも思ふを我意の片思ひを

恨

悔らるる吹く風は虫の跡を思ふの恨このころハ

雑十首

曉

夜昼此中ちりきり心む境をりし時を解し

名和松

千世の陰よりもとるともをり此ハ今幾程ういきれ去る

窓竹

心あまや外面乃祢さしあにち思ひて生る窓の長竹

山 家

まのちりり心あまや山あま人も思ふてぬ庭とよとれ

田 家

あくにちり心あまや海をいふ海はせつらひはるにちり

羈 旅

ちり心あまや波乃末を思ふ心あまやを思ふ

述 懐

立海り公の心あまや思ふは思ふ心あまやを思ふ

夢

不眠人の夢よこころを思ふささくも思ふ公ちりり

秋教

あつきの日星れ光をさうしめおそ思ひとも云はれし法は乃其  
祝言

えはそあまに此露のうらみ世り思ふとお作し

道や河ぬか解

僧似雲況我の庵室不恒依りし法苑詩經乃  
はましくし思ひをさうしめ十百首ふりり  
月れさうなる法苑し終りぬそ一帖を  
神ふしそ末五つと顰目者の牆を窺しそあま  
ともままを園正るふ崑山合浦の玉をばは  
祢より年し法にれ乃り心さし乃ぬらき  
拙人なりんと歎賞やむしとなれのあまなり  
はさなき詞法はくりそまを尾をさうし  
和奇乃備れなまもあはれ

うらむ

こころを玉のむら梨をさうしみる

實積

